

授業論壇時評

「わかる」のこれまで

森脇健夫

*「わかったつもり」

私は「この間まで」「流れに従はず」とは「時流に逆らう」とだと思っていた。ところが、新明解国語辞典(三省堂)には、「神をさして船を進める」とあるではないか。わかったのはこの論壇時刻のおかげである。タイトルとして使おうと思いついた。

身近な人にそういう感想はないかと聞いたら「古風」を「古風」だとずっとと思っていたと聞いて笑ってしまった。「古風」(一茶)のさわやかな朝なるほど感じるではないか。

この「わかったつもり」がつまずきのものと西林克己氏は言つた(「わかったつもり」は新編社一九九七年)。だから、「わかったつもり」が、文章理解の

領域において、いかに認識の進展を妨げているか、そして、われわれが「わかったつもり」を意識し、そこから脱却するにはどうすればよいか」がこの本のテーマである。

*「わかった」状態からの脱却

西林氏は「学校での『読み』の教育は『一般的に育つてかなり豊富すべき状態にある』と言ふ。それは『よく読むための指導がされていない』ことと『指導してはいけないことが指導されている』ことである。前者については、「あらすじ」「まとめ」を求めて、細部をきちんと読みせずしてしまって、また「気持ち」を問う、「文書内主義」に陥ることによって新たな文脈を設定することによって「わかったつもり」を打破し、新たな「統一的文脈」を生み出させようとするからなのだ、と考えてみれば、つきりする。そして、いつでもそうした指間が有効というわけではない条件がある。

それにしても、経験則によつて教師が「物で言えば、新たな展開(子どもの思考)を生み出せる」という仮説を持つに至ったということはすばらしい「読み」の問題である。後者は、まさに読み手の解釈の自由を侵してしまった教師の「読み」の

ことは想像がつきやすい。文脈についてはどうだらうか。

文脈を変えれば、部分から引き出される意味も変わる。注文の多い料理店の賣頭部分の「びかひかする鉄砲」が好例である。「金持ちの紳士」の文脈で読むと、鉄砲は「派手で高価」と読めるが、「群の猛獸」の文脈で読むと「使い込まれておらず真新しい」と読める。「文脈を交換」したことにより「新しい文脈を付加」することによって、多様な読みが促進されるのではないかと筆者は述べる。

*国語教育の「U」の問題

西林氏は「学校での『読み』の教

育は『一般的に育つてかなり豊富すべき状態にある』と言ふ。それは『よく読むための指導がされていない』ことと『指導してはいけないことが指導されている』ことである。

前者については、「あらすじ」「ま

くした指間が有効というわけではなく、その安定状態を崩す必要がある。そこで採り得る方策は二つだ。「統一的な文脈」か「部分から引き出されれた意味」のどちらかを変化させることだと思う。